

國語辭書の欠點

見坊豪紀

七六

國語辭書においていちばん後れている点は何であるか。第一にそれは方法論である。たとえば、つぎのような問題を世の國語辭書編集者はどれほど深く考え、かつ実践しているであろうか。

1 辭書の本質について。――辭書とは、ことばを一定の順序で配列したものであるといった程度の考察からは、なにもものも生まれないであろう。

2 辭書は、ことばをどのような原理にもとづいて登録するか。

3 辭書は、見出し語の定義〔「語義」〕をどのような原理によつて与えるか。

4 なぜ國語辭書は役にたたないか。その欠点を補なう方法はなんであるか。等々

もちろん、これまでの辭書編集者が以上の根本問題について、多かれすくなかれ考察をめぐらしたことは確かである。なんらの原理的考察もなしに、ひとつの、ともかくも体系的な辭書がつくりあげられようとはだれも考えないからである。じつさい、新村 出博士の「日本語辭書の理想と現実」(1)のような指導的論文を始めとして、多くの

人が多くの立場から辭書について論じている。しかしながら、このような考察の結果を序文または凡例にはつきり示してくれた國語辭書が余り多くないように思うのはわたし一人であろうか。わたしのひが目でなければ幸いであるが、一般に大形の國語辭書は、分量のわりには方法論が貧弱であるように思われる。すくなくとも序文や凡例からわたしたちは、ほとんど辭書の方法論らしいものを見つけないことのできない場合が多い。ある權威ある辭書に書かれているような、「従来の辭書体の書數十部をあつめて、字母の順序をもて、まづ古今雅俗の普通語とおもふかぎりを採取分類して、解釈」を考えると、いうやうかたは、たしかに先駆者としての苦心を十二分に物語つてはいるけれども、けつきよく方法論としては、非常に幼稚だと言わないわけにいかない。(そればかりか、じつは方法論としては重大なあやまりさえおかしているのである。)

第二に國語辭書のおくれている点は何であるか。それは、編集の實際面であり、やがてこのことは方法の實踐の不完全ということに帰着する。たとえば何かの古典を手にしたとしよう。そして任意のことばを選びだし、これを大形の國語辭書について調べてみるとしよう。(こ

のさい、選ひ出すことばは、なるべくありふれた普通のことばがよい。すると、わたしたちは、国語辞書の貧弱さが、どんな点に具体化されているか、ということをおぼえ、わたしは、たとえ次のような現象が日本の国語辞書には、少しもめずらしくない、ということをおぼえ、わたしたちは容易に発見することができる。

1 のつていないことばが、ずいぶん多い。

★凍てつく 出で向ふ(謡曲「鉢木」) ★いほふるかきて(雄略

紀) ★おほつびら(ただし「おほつべら」はある) ★隠し

汁(日本料理で) 「以上A大辞典についての調べ」

2 語釈のしかたが不十分である。

(1) 「おく」(奥) 「みちのく」(みちのおく) (陸奥) の意味がない。

「A大辞典・B大辞典」

(2) 「おちある」(落居) は、A大辞典に

心しづまる。おちつく。竹取「こころの日頃、思ひわび侍りつる心は、けふなんおちあぬる」後撰雜二「官任へし侍りける女の、男につきて人の国におちあたりけるを」と書かれてはいるが、これは次のように二つに分けて説明するの
がよいであろう。

(一) 心しづまる。「心が」おちつく。竹取「……」

(二) おちつく。後撰「……」

(3) 「かなふ」(叶・適) は同じA大辞典に

一 善く合ふ。ふさふ。つりあふ。あてはまる。適合す。

相応す。(用例略) 二 匹敵す。相及ぶ。(用例略) 三

願ひ成る。思ひ遂ぐ。思ふ通りになる。成る。成就す。古今離別「命だに心にかなふものならば、何か別れのかなしからまし」拾遺雜上「わび人はうき世の中にいけらじと、思ふことさへかなはざりけり」源紅葉「思ひしことかなふとおぼす。四 為し得。堪ふ。能くす。「手足かなはず」

宇治拾遺「我が心一つにてはかなはじ、此の由を院に申してこそは」(傍点は、見坊)

とあるが、用例から判断するに、「三」の語義は余り適當だとは申されない。たとえは、「願ひ成る。思ひ遂ぐ。」は、「かなふ」の単語としての意味であると見るよりは、かえつて、「かなふ」を含む文脈全体の意味であると見る方が適切ではないだろうか。ここは当然、「願ひ」「思ひ」を括弧に入れて、「願ひが」成る。「思ひを」遂ぐ。のように修正して、全体を簡単にすべきであろう。なお欲を言えば、「とてもかなわぬ」などのように、打消しの形を伴った時に生じる特殊の意味を明記してほしいと思ふ。「もつとも、この大辞典には、「かなはぬ 不叶」として「為さねばならぬ。已むを得ぬ。」という解があるが、これだけでは足りない。」

3 用例のあげ方が不十分である。

(1) 「うら」(已)

A大辞典によれば、この用例は「堀河波敷上」の「うらが寝た

懐へ、盗人が這入つて」と、「膝栗毛初」の「あに（「何」がしやあしやあといふ音を聞くと、うらも気が悪く成つたもんだんで」とであるが、同じA大辞典の「不便さ」の所に左の用例があつて、一層古い用例を増補することができる。

醒睡笑^五 「うらが処の子持は」

(2) 「うんめい」(運命)

A大辞典の用例は、「諧班女」の「平家の運命、悉くつきの夜すがら声たてて」と、「南史^{羊玄保}」の「文帝嘗曰、人仕官非^ニ唯須^ニ才、亦須^ニ運命^ニとであるが、西鶴の「武道伝來記」にも次の例がある。

暫く鎬を削^り切り結びしが、仁七郎運命強く、此れも中腰を切り下げ、弱る処を畳み掛けて切り立て、首尾止め刺す時

(第三卷第一話)「日本古典全集刊行会版・西鶴全集・第五卷66ペ・昭和21年初版」

(3) 「おやぢ」(親仁)

A大辞典によれば、「一 他人に対して、我が父の称」についてはなにも用例がない。それなのに、「二 おきな。ぢぢい。老人」については「聞上手」から「寄合辻番のおやぢが、菊を造り」の用例をあげ、「三 かしら。親方。おやぶん」については、「博多小女郎波枕上」から「我れ我れが相手になる。おやぢ一人心もとない」の用例をあげている。こう見てくると、一 の「我が父」の意味は、なにか明治以後の新しいつかい

方であるかのようにも感じられる。(江戸時代のことばであるならば、当然用例があつてもさしつかえがないからである。)ところが西鶴をよむとすぐ明らかになることだが、「我が父」のばあいの「おやぢ」は、当てもさかんに使われたらしく、「武道伝來記」第三卷第三話に

座を立つを待ち受け、物の見事に討ち果さんと思ひながら、いやいや、此の事を云ひ募りて斯うなる時は、いよいよ親父の卑氣^{ひげ}引け、恥の上の恥辱、此処は分別所なり。「同前76ペ」(なお、第三卷第四話にもある)

とあるほか、「日本永代蔵」第一卷第二話にも
されば限り有る命、この親仁^{おやぢ}其年の時雨降る比、憂への雲立ち所を待たず、頓死の枕に残る男子一人して、此跡を丸取りにして、「同前書、8ペ」

と出ている。これで、A大辞典の「一 我が父」が、「二」と「三」とならんで同じく江戸時代の用法であつたことが明らかになつたが、このように重要な用例がおちていることは、編集者も修訂版の序文で残念がつているように、「五十音索引の作成について」江戸時代は、余り多数な書であるから、已むを得ず十数種を選択するに止めた」ためにおこつた、やむを得ない結果でもあつたろう。しかし、一面から言うると、これはほとんどあらゆる国語辞書に共通して見られる方法論上の欠点——日常語、輕視の一つのあらわれとも言えなくはないのである。

(4)「きこゆ」(間)(自動下二)

A大辞典は語義の二に「義通ず。わけがわかる。会得せらる。」とあつて、「徒然草」から「酒中略聞、こえぬことどもいひつつよろめきたる」を引き、「狂言賣煎物」と「同六人」とから、それぞれ「それなればきこえました。成るほど売りやうがござる」ならびに「さてきてきこえぬ、人ぢや、」を引いている。しかし、早く「枕草子」「小白河といふ所は」の段に、「なにかは人のかたほならむよりはげにときこえてなかなかいとよしとぞおぼゆる」「春曙抄本による。校合は三卷本(朝日新聞社日本古典全書「枕草子」94べ)による」とあるのは、やはりこの意味の用例とすべきであろう。「もつとも、厳密には、このばあいは「理解されて」とか「理解が行つて」とか解するのがより正しいのであろうが、今そこまでは立ちいらぬ。)A大辞典の語釈の組織にしたがえば——B大辞典もそうであるけれども——ここにに入れるのが一番適当なのである。「ちなみに、B大辞典はA大辞典よりも後に編集されたのに、「きこゆ」の項目は解釈が極端に簡単でしかも不完全である。たとえば「においがきこえる」ばあいなどは全然のつていない。」

4 「説明の文中に著れたる語は、遺漏なく各条の下に掲出せんことを務めたり。」とは申しがたいことがよくある。

なるほど、「葉先」とか「葉縁」とかいつた植物学上の術語までも、たしかにはいつているけれども、「葉間」「延齡草」につ

かわれている」は見あたらないし「えふかん」のところに、「角点」「一次」の中に出てくる」という術語もあがつていない。もつとも、このようなことはなにもA大辞典だけの不満ではなく、あらゆる国語辞書、あらゆる百科辞書、あらゆる専門辞書が共通におかしている方法論的、實際的誤まりなのである。

このようにして、わたしたちは、古典ととき照らしあわせることによつて、またおなじ辞書のなかのちがつた部分をひきあわせることによつて、いくつかの欠点を容易にみつげだすことができる。それでは、二つの、またはそれ以上のちがつた辞書をくらべあわせることはどんな結果をもたらすであろうか。

たとえば「洗う」ということばを引いてみることにしよう。

A大辞典には

あらふ「アラウと発音せよ、ということ」

とあるのに、B大辞典には、

あらふ「アロウ (arou) と発音せよ、ということ」

とあることにわたしたちは気がつく。それでは「さきはひ(幸)」はどうなつてゐるだらうかというに、A大辞典は

さきはひ「サキハイと発音せよ、ということ」

とあり、B大辞典は

さきはひ「サキワイと発音せよ、ということ」

である。

どちらも現代日本のもつとも權威ある大辞典であるのに、こと発音

にいたると、随所にこのようなくいちがいが現われるのは、一体どうしたことであろうか。国語辞書では、まだ発音の問題さえ片づいていなかったのであらうか。

辞書にとつては最も重大な、またもつとも目立つた発音Vについてさえ、こうである。もしそれ以上のこまかな点にまで立ちいつて、二つの辞書を比較しはじめたならば、ひとびとは、解決しなければならぬ大問題、小問題がきびすを接して現われ出るのに完全におどろいてしまうにちがいない。

しかも注意すべきは、このような問題の実例は、文字どおり百も二百もころがつていて、極言すれば、一度辞書をひくことは、ただちに増補訂正すべき箇所を一つ発見する結果に終わらないことはない、といつても大したまちがいはならないのである。

このように、国語辞書の実際の面は、理論の面におとらず、いや理論の面以上にかずかずの欠点を持つている。辞書を引けば引くほど、そして多くの辞書を引けば引くほど、わたしたちは実際にそうした印象で胸がいつばいになる。

わたしたちは、なにも先人の苦心のあとを尊敬しないわけではなない。感謝の気持をこそ持つても、決してこれをけいべつしようとは思つていない。しかしながら、わたしたちは先人の功績を十分にみとめると同時に、それが内に持つところの理論的、実際的な欠点をはつきり見さだめ、それを補充するためにはどうしたらいいかをよく考えなければならぬのである。

実践というものは元来、意識するとしないとを問わず、必らずなんらかの程度で理論を反映している。してみると、實際面の欠点を順序正しく考えていくということは、結局、方法的な欠点も同時に考えていくことなのであつて、せんじつめると方法的考察と實際面的考察とは、じつは同じことになつてしまふのである。じつさい、方法的考察が實際面にふれることもなく、實際面に指導力を持つこともないとなれば、ひつきようそれは空論というはかはない。また逆に、實際面の考察といつても、それが方法論を予想し方法論に裏づけられるのでなければ盲目的な情熱の浪費にすぎない。いずれもその一方を欠いては現実に即した考察といふことができないのである。

この意味においてわたしたちは、どんな考察をするかといふことを考えるまえに、まず、今すぐやれる対策と、今すぐにはやれない対策との二つがあることを最初にみとめておかなければならない。けだし理想的辞書の編集といふことは、かのオックスフォードの「新英語大辞典」(NED)のばあいを見ても明らかのように、かつして三十年や五十年の短期間に出来上がるものではない。「根本的に多数の典籍から語彙を蒐集し、整理するという基礎的作業」だけでも二三十年はらくにかかるであらう。(NEDが立案されてから第一冊を刊行するまでには三十年の準備期間が必要であつた。)

しかしながらわたしたちは大急ぎで付けくわえたい。理想的な国語辞書をつくるには百年ぐらゐかかるけれども、いまある国語辞書を理想に近づけるのだつたら百年をかけたなくてもいいVと。その意味はこう

である。——いまある国語辞書には、百年かけなければ直すことのできない根本的な欠点もあるが、同時に、いまずく改良することのできるような小さな欠点もある。この二つはどちらも辞書の方法論にとつては、おなじぐらい、重要な欠点である。だから、いまずくできるような方法的改良案を適切に具体化するならば、いまある国語辞書は、いまのままでもたちまち半分は理想化されてしまう。もちろん、その急所をつかない改良案ならばむだに近いのだが。——という意味なのである。

こう考えることに誤まりがないとすれば、みぎの意見は必然的に次の意見にまで発展しなければならない。

△百年かからなければ理想的な国語辞書ができあがらないということは学者の常識である。しかし、なかには百年かからなくても理想的にでき上がる性質の国語辞書もあることに注意していただきたい。いや、百年もかけてはかえつて何にもならなくなる国語辞書もあるのだし、しかも、その辞書たるや、百年かけて作られる国語辞書とまったくおなじ方法論、まったくおなじ手続きにしたがつて作られるのである△と。

△理想的な辞書△はもちろん必要だが、それと同時に、右にのべた意見も注意されるべきであろう。深い方法論だけを論じあつて、今すぐできる重要な改良案に気づこうともしないかに見える方法論者たち——もしそう人たちがいるとすれば——にわたしはもう一度考え直していただきたいと思うのである。それから、百年かけなければいい辞

書はできないものと頭からきめこんで、いまある辞書の欠点を改良しようとする人たちがいるとすれば、あるいはまた、百年かかつてできあがるはずの理想的な辞書の立場から、現にこころみられつつある具体的改良案を否定的にだけ批評しようとする人たちがいるとすれば、わたしはそうした態度に賛成することができない。△五十歩百歩△ということばは、絶対的な高みから下される否定的な批評としては意味があるのである。しかし、百歩が五十歩よりはまさっていることも時にはたしかである。絵にかいた理想案もとより必要なことであり結構なものにはちがいない。しかし大衆は何よりもすぐ手にすることのできるものを求めている。辞書が現実にくらかでも改良されているならば、大衆はその分だけは確実に利益をうけるであろう。理想へたどりつくということに対してわたしは第一に以上のように考えているのである。

第二に、理想に到達するには、低い、わかりきつた所から始めなければならぬ。たとえば、実際に何方ということばを現実に操作し、現実になんらかの改良を行なつてみて始めてわたしはほんとうに理想へ行きつくのである、と考へる。一見つまらない労働に従事して始めて、理論的な考察だけではあらわにされなかつた、ほんとうの問題がぞくぞく出てきて、理想を具体化するには、一体どんな手続きが必要であるかが、ほんとうにわかってくるのである。率直に言つて、これまでの多くの辞書論は問題の解決を示すものではなく、たんに問題の手がかりを暗示するだけの役割しか果たしていない。これは辞書

論というものがそれ自体がもつ基本的性格からしてもむしろ当然のことではあるのだが、真に本質的でしかも具体的な問題は、その内側にひそんで、いると言つていいように思う。

第三に言いたいことは、理想的な方法は、すぐやれる改良案とおたがいに排斥しあわなければならないものでは決してない、ということである。まさにその反対に、この二つのものは同時に着手されていいし、また、されなければならないのである。無意識のうちにひとびとが考えたがるAあちら立てればこちらが立たずVという考え方には賛成することができない。

要するにわたしが言いたいのは、国語辞書には根本的な欠点とそうでない欠点とがあること、前者を改良するには理想案が必要になるが後者の改良はすぐにもできること、しかも、後者の改良は原理的には前者の改良とまったく同じ方法論にもとづくものであること、だから両者は同時に着手されてもさしつかえないこと、むしろその方が望ましくもあり、また大衆もそれによつて早く利益をうけること、などであつた。

ところでA同じ方法論Vとはなにか。それは、国語辞書を真にことばの辞書として純粋化することである。わたしがさきにあげた欠点の具体例はいずれもこの方法によつて始めて改良される。また、NEDが編集の基本方針としてとりあげたA歴史的原理Vも、おちつくところは同じことになる。ただ日本の国語辞書の現状から言つてA歴史的原理V以前の段階も同時に考慮しなければならぬ。それらの一切を

含めて、わたしはおおまかにA国語辞書の言語辞書化Vと言つておくのである。

つぎに、一歩進んで、いままでも作れる理想に近い国語辞書とはなにをさすか。それは、現代語の立場から国語現象を整理した辞書である。ただし、これは現代語だけを集めた辞書ということではない。それでももちろんかまわないが、それではなければならないことはない。たとえば古典語がはいつていても、それが現代語としての立場から正しく処理されていればいいのである。逆に、現代普通につかっている言葉だからといつて、なにかの大形辞書から語釈をまるうつしにしたのでは、現代語としてはじつは過不足が生じるにちがいない。たとえば「おとこ（男）」という単語を普通の小形辞書でしらべると、たいていは語釈の何番目かに「おつと（夫）」という意味がのつている。しかし、現代語としてはたしてそんな意味または用法があるだろうか念のために、現代語としての用法を記述することを本体とする和英辞書のたぐいを見ても、そんな記述は見あたらない。「たとえば、研究社・新和英大辞典には、1「男子」2「奴、漢」3「大人」4「下僕」5「男子の意気」6「情夫」の六つだけである。」そこで、用例のある大形辞書にさかのぼつて調べてみると、土左日記にその例がみえていて、「よき人のを、とこにつきて、下りて住みけるなりけり」とある、さらに「和名抄」に「夫乎字度、一云、乎度古」とも見えていゝことばであることを知る。してみると、現代語の立場から考えるかぎり、「おつと」の意味は削除した方がよろしいようである。またその反対に「あく」

(上)「あげる」(上)ということばの解に、「子供をもうける」ばあいの解を施したものは見当たらないが、これは当然現代語としては増補しなければなるまい。同じことばに「参考書をあげた」とか「バイエル」(「教則本」をあげた)のように、「(本を)勉強しおえる」ときの用法があるけれども、この用法をはつきり説明している辞書もすくない。単に「刈り上げて」という古典の用例だけを説くのでは不十分であろう、

およそ以上のことが、国語辞書の欠点とその対策ということに関し、て考えられるのであるが、最後にのべた二点——国語辞書の言語辞書化の問題と現代語辞書の問題——について深く立ちいるためには、まず現にある国語辞書に共通の基本性格を反省することから始めなければならぬ。白石大二氏も指摘されたように、「従来の辞典は、古典語辞典、文章語辞典、読解辞典ともいべきものである。」(2)古語辞書、雑語辞書というのが、大形の学術的辞書から始めて小型の実用辞書に至るあらゆる国語辞書が共通に持つ基本的性格である。現代語辞書はこのような性格を全く切りすてた、完全に新しい観点から構想されなければならぬ。そして構想が現実に対して十分有効であり、十分意味があるためには、現にある国語辞書の欠点をえぐり出してこれを方法的に整理し位置づけなければならない。たとえば、見出し語のえらび方に欠点があるということが明らかになつたならば、新しい辞書の見出し語は、少なくとも、現代語辞書に一層ふさわしい性格を持つ他の辞書類から求めなければならないだろう。また、語彙採集の

観点と技術も全く新しくならなければならないだろう。およそこのようなことを具体的な実践によつて解釈することが、この文章のはじめに述べた四つの疑問のうちの第一、第二に対する答えとなるにちがいない。

現代の国語辞書に共通な基本性格の第二は、前近代性ということである。人そうじて日本の国語辞書は、まだ近代化されていないVというのがわたしの卒直な感想である。もちろん多くの辞書の中には比較的近代化された辞書もあり、一冊の辞書の中でも、わりに近代化した部分もある。しかし、辞書の方法論として、はつきり「近代化」ということばをかかげ、そうした自覚のもとに辞書の編集を全面的に実践したものはほとんどないのではあるまいか。たとえば、見出し語の近代化はどのように自覚されどのように進展したか。また語釈の近代化はどのように自覚されどのように実践されてきたか。辞書の近代化を考える人は、とりわけこの二つのことをまず考えなければならぬ。見出し語の近代化とは、決して新造語や新しい外来語を補充することだけで終わるものではない。もちろん、それだけでも遺憾のないようにすることは大変な労力であるが、それ以外にもつともつと視野をひろめ、かつ見出し語として登録するための原理をはつきりさせる必要がある。また、のせられなかつたことばを、どのように処理して辞書にその存在を反映させるか、ということも実用的な注意としてはきわめて重要であろう。次に語釈の近代化に至つては、ほとんど考えられていない、と言つても過言ではあるまい。単語の定義(Definition)

ということ、定義そのものの方法論と関連して外国では辞書論のかなり大きなベエジを占めるのではないかと想像されるが、日本ではまだ余り問題にされていないように思われる。

およそこれらのことについては、紙数の関係もあり、すべて別の機会にゆずり、いまは骨組の一端だけを暗示するにとどめる。

(1) 新村 出「国語問題正義」（一九四一白水社刊）におさめる。

(2) 白石大二「現代語の研究史」（国語学 第八輯67ページ・一九五

二 武蔵野書院刊）

あとがき

つきにかかげるわたしの論文は、この論文と直接関係がある。

1 国語辭書の盲點（全國大學國語教育學會編集「國語科教育」第一集収録・昭和27年5月教育評論社刊）

2 現代語辭書の批判とその編集（金田一京助博士記念論文集「収録・三省堂近刊」）